
戦線協定

香住

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦線協定

【Nコード】

N0746G

【作者名】

香住

【あらすじ】

揺れうごく、四人の恋心——100のお題に沿ってつつった短編集

000：まえがき

■ご案内

この小説は、一遍1000文字以内の短編集です。
台詞お題をお借りして来ましたので、一遍に対してひとつのお題台詞を入れます。

■登場人物

斉藤 菜津：素直でまっすぐな主人公
水野 準：意地っ張りで口が悪い、菜津の幼馴染
椎名 亮介：余裕のある態度の穏やかな男
坂口 七美：髪長い美女、椎名の彼女？
天沢 光輝：人からかうタイプで準と椎名の後輩

■台詞お題

001 アレを手離すつもりはないね。
002 こんなトコでやめろよ。
003 いい思い出もあっただけだね。
004 それは無理ッ！
005 こっち見ないでくれる？
006 待ってるよ。
007 やっぱ帰る。
008 無理強いは良くないな。

0 0 9 ・手、痛いんだけど？
 0 1 0 ・もう、疲れた。
 0 1 1 ・お楽しみはこれからサ。
 0 1 2 ・たまにはこっち見てよ。
 0 1 3 ・なんかフラフラする。
 0 1 4 ・わかったから離せって。
 0 1 5 ・今だけでいいから、このままでいてくれる？
 0 1 6 ・逃げんなよ。
 0 1 7 ・目開けて寝言か？
 0 1 8 ・もう遅いつて。
 0 1 9 ・もうヤだ。
 0 2 0 ・被害甚大だな。
 0 2 1 ・誤解だつて！
 0 2 2 ・アノ存在はストレス以外の何物でもないね。
 0 2 3 ・ちよつと捕獲してくる。
 0 2 4 ・気配殺して背後に立たないでくれませんか？
 0 2 5 ・ちよつとだけ我慢して。
 0 2 6 ・参ったね。
 0 2 7 ・だから、クライつて言つてんじゃん。
 0 2 8 ・何、このサツムイ空気？
 0 2 9 ・イヤなわけないだろ？
 0 3 0 ・ウーワ、吐きそう。
 0 3 1 ・いつになったら終わんの？
 0 3 2 ・あんま無茶すんなよ。
 0 3 3 ・ナニ、修羅場？
 0 3 4 ・追い込むのは趣味だから。
 0 3 5 ・なんでココにいの？
 0 3 6 ・やめとけよ。
 0 3 7 ・イイ子だから、こっち来な。
 0 3 8 ・嘘でもいいよ。

0 3 9 さつきからスゴイ邪魔なんですけど。
 0 4 0 冗談でしょ？
 0 4 1 メガネフェチ？
 0 4 2 おもしろそうなコトやってんじゃん。
 0 4 3 なんか怒らすようなコトした？
 0 4 4 今、一番会いたくないんだよね。
 0 4 5 昔々の出来事ってヤツ？
 0 4 6 夢なら良かったのに。
 0 4 7 ちよつと声、聞きたくて。
 0 4 8 それ以上近づくなよ。
 0 4 9 …会いたい。
 0 5 0 ホントは、もう無理だつてわかってる。
 0 5 1 なんて、こんな好きかなア。
 0 5 2 荒れてんなア。
 0 5 3 もうグチャグチャだよ。
 0 5 4 この扉を開けたら、もう戻れない。
 0 5 5 何やってんだか。
 0 5 6 ものスゴイ怪しいですよ。
 0 5 7 アレ、気づいた？
 0 5 8 ヤッベ、空耳が聞こえるよ。
 0 5 9 真ッ昼間からよくやんね。
 0 6 0 そういうトコ、意外に可愛いかつたりするよね。
 0 6 1 素直じゃねーな。
 0 6 2 昨日は無理させたから。
 0 6 3 信じると思う？
 0 6 4 なんかキャラ変わってない？
 0 6 5 アリエナイ組み合わせだな。
 0 6 6 オトせるの？
 0 6 7 ちよつと口封じ。
 0 6 8 忠告というより警告だね。

0 6 9 ・人には踏み込んではいけない領域があるんだよ。
 0 7 0 ・誰だよ、そんなコト言ったの？
 0 7 1 ・相変わらずイイ趣味してるね。
 0 7 2 ・束縛されてないと不安になる。
 0 7 3 ・怯えさせてどうすんだよ？
 0 7 4 ・ユルイのは頭だけじゃないんだな。
 0 7 5 ・取柄は顔だけでもんね。
 0 7 6 ・お蔭で睡眠不足ですよ。
 0 7 7 ・もうちょい手加減してやったら？
 0 7 8 ・ソレ喋ったら、…わかってるよな？
 0 7 9 ・帰りたくない。
 0 8 0 ・何が言いたいワケ？
 0 8 1 ・人の世話焼いてる余裕あんの？
 0 8 2 ・放任主義もそろそろ潮時だな。
 0 8 3 ・そんなコトあるわけない。
 0 8 4 ・いい加減、離してくれる？
 0 8 5 ・面と向かってそんなコト言っな！
 0 8 6 ・カワイがつてますよ。
 0 8 7 ・今更、何言ってるの？
 0 8 8 ・初耳だな。
 0 8 9 ・もう限界。
 0 9 0 ・無意味に触るのやめてくださいね。
 0 9 1 ・支払いは金以外でもOKよ？
 0 9 2 ・選択を誤ったな。
 0 9 3 ・無知つてのは怖エな。
 0 9 4 ・どんだけ神経太いんだよ。
 0 9 5 ・検討する価値すらナイね。
 0 9 6 ・おかげで賭場のレートは急上昇。
 0 9 7 ・ロクでもないメンツだな。
 0 9 8 ・ガードが甘いんだよ。

099 トライアルってカンジ？
100 リスクは覚悟の上。

001：アレを手離すつもりはないね

宣戦布告、ってああいうのを言うんだろーか。

シヨツクなわけじゃなかった。椎名が菜津を気に入っているなんてすぐにわかった。視線のやり方や声のかけ方や。なのに珍しく準が動揺している原因は、椎名がはつきりと、しかもそれを当の菜津じゃなく準に言ったことだろう。

「なっちゃん、可愛いよね」

にこにこトレードマークの笑顔を崩さずに椎名が言う。目線の先には客の注文を聞いている、菜津。

「……だから？」

「だから、って……否定しないの？」

余裕の笑顔は崩れない。ちょっとは驚くかと思ったのに、思惑が外れて準は逆に返答に詰まる。その間が既に椎名にとっては答えになっていた。

「別に」

「否定できないよ、ね？ そう顔に書いてある」

くすくすくす、と笑う。椎名のそんな悪戯っぽい笑顔は女どもに随分と人気がある。確かにわからなくはないけど、と準は手元のフライパンの中身をひっくり返す。

「椎さん、皿。——仕事しろよな、仕事！」

ハイハイ、と肩を竦めて椎名が白いプレートを出した。

「準、何苛ついてるの？」

話題の主がオーダーを持って近づいてくるのに、準はふいつと顔を逸らした。

「何でもないよ。なっちゃん、これ五番ね」

「はい」

どこまでも大人な椎名の言動に、準が悔しさを覚えても仕方ないだろう。事実、椎名はそれをわざと引き出すためにそうしているに他ならなかった。

「準、ずっと一緒なんですよ？ いいね、幼馴染って」
「別に」

菜津の字で書かれた新しいオーダーをみて、準は次の作業に入る。椎名は相変わらず厨房からホールを動き回る菜津を見ていた。

「クールだなあ、準。そのポジション、俺に譲って欲しいね」

準の手が一瞬止まったのに気付いてか気付かずか、椎名が続けた言葉が決定的だった。

「どうせならなっちゃんも俺に譲ってくんないかな？」

まるで、明日の休みのバイトを代わってくれというような、そんな軽いレベルで発せられたその言葉に、準はさすがに火を止めると椎名に向き直る。

「アレを手離すつもりはないね」

「どうしても？」

「どうしても！」

「なっちゃんが嫌だと言ったら？」

準が返答に詰まる。椎名はさすがに言い過ぎたかと思いつつ、言った言葉は取り戻せない。にっこりと大人の笑顔で余裕を携えて、目だけ、ギラリと準を見た。

002：こんなトコでやめろよ

バイトからの帰り道は駅までが皆同じ道のりとあって、いつものごとく菜津を真ん中に準と椎名が両脇につく。椎名がいつも道路側を歩くのが準にしてみれば気に入らないひとつの要因でもあったが、そんな些細なことを菜津の前でつつくのは止めていた。

いつもの雑談の間で、ふわりと三人の前に影が立ちほだかる。近寄っても避けないその距離で、やっと菜津がお喋りを止めて目の前に立った女性を見つめる。女の長い綺麗な栗色の髪が風でふわりと揺れた。

「――亮介」

「あ」

綺麗なひとだ、と菜津は思った。それから瞬時に何もかも理解した。彼女のこと、それから彼女が何を考えて次の行動に移ったのかも。敵わない。敵うはずない。

椎名が苦笑して菜津の傍から離れると、女の腰にさりげなく手を回す。それに呼応するように彼女が背伸びをしてその首筋に唇を埋めた。

「七美、こんなトコでやめろって……あ、じゃあ俺、ここで」

「お、おう」

「……おやすみなさい」

去っていく椎名の背中、隣、ぴたりと傍についた七美がちりと菜津を振り返り、口元に笑みを浮かべた。その笑みの意味を、菜津はなんとなくわかったような気がして顔を伏せる。

「あれ……何？」

目を丸くしたまま準がまだ二人の背中をぼんやり追いながら呟くのに、菜津は唇を尖らせて答える。

「椎名さんの彼女。……知らなかった？」

「知らなかった！」

準としては初耳だ。椎名は菜津を気に入っていると思い込んでいたのもあるが、七美は店に立ち寄ることはあっても、こうして帰り道で待っていたことなどなかったからだ。

ホール担当の菜津としては、七美に笑顔で会釈をする度にずきりと胸が痛んだ。それにたった今見せ付けられた光景はその駄目押しだ。いや、七美は恐らくそれをわかっていてしたのだろう。最後に見せた微笑は何処か挑発的で、勝ち誇っているように思えた。

003：いい思い出もあったんだけどね。

今聞いた言葉は自分の妄想なのだろうか？ いや、妄想というのは自分の欲望に忠実な筈だから、その限りじゃない。だから鸚鵡返しに問うしか、なかった。

「別れた……？」

「ああ、うん」

椎名の返答はまったくもっていつも通りだ。こうなると、慌てている準の方がどちらかというと滑稽に見えてしまう。

「別れたって……こないだあんなに」

「ま、いろいろあるのよ、大人な事情がね」

につこりと必殺の笑みを浮かべる椎名のことが、準にはイマイチよくわからない。彼女がいるというのもし知らなかったし、彼女がいるのに菜津のことを譲れと言ったり——もしかしてオレ、からかわれてるんだろうか？

「仕方ないよね、七美が俺じゃ嫌だって言うんだし」

「……椎さん、なんかしたの？」

椎名が一瞬、言い淀んだ雰囲気を見せたがすぐに笑みに摩り替わる。

「んー？ まあ、いろいろと。……したりしなかったり？」

疑わしげに椎名を見る視線は、菜津のことを非難しているようにも感じる。それが椎名の考え過ぎなのか、もしくは準があまりにも隠さなかったからなのかは、わからない。

「いい思い出もあったんだけどね。最後は見事に嫌われちゃったよ」
慰めの言葉が今の椎名に必要なのかどうか、準は量りかねていた。彼女がいた、ということと菜津への思いが本気ではないんだろうと思っただけだが、別れたとなればわからない。いや、その前に椎名のこの気楽な言い方は——傷ついているように見えなかった。

「椎さんは……辛くないんすか？」

「うん？ 何が？」

「その……彼女と別れたこととか」

「七美が駄目でも、別の子と付き合えるし。あ、なっちゃんとかいいねー」

明らかに挑発を含んでいる椎名のひとことに、準は気付いていたにもかかわらずむっとした顔を隠せない。七美に会ったときの菜津の様子を見ていれば準には菜津の気持ちがわかっていた。もしも今、椎名がフリーになって、そして菜津に声をかけたら、きっと――

「菜津は、駄目っすよ。手、出さないでくださいね」

自分では目いっぱい軽く、冗談交じりで言っただつもりが妙に低く響いていた。椎名はただ肩を竦めただけで何も答えず、それが準には大いに不服だったのだけれど。

004：それは無理ッ！

菜津が何度目かのコーヒーを入れにいったときだった。

「ごゆっくりどうぞー」

「……菜津、さん」

急に名前を呼ばれて、菜津の顔から営業スマイルがふっと消える。そして自分の名を呼んだ客の顔をまじまじと見て、そしてやっと気付いたように「あ」と目を見開いた。

「——光輝くん！ うっわー、びっくりしたあ、久しぶりだねー」

「……僕の前、何度通っても気付かないんですね」

光輝が些か大袈裟に溜息をつくとき、菜津は恥ずかしそうに頬を染めて照れくさそうに笑う。その笑顔に光輝がふっと瞳を緩めた。

「ごめん、だつてまさか居ると思わなくて」

「ここ来るの久しぶりなのは確かだけど、忘れられてるなんて思つてもみなかったかな」

焦つて言い訳を口にする菜津に、悪戯っぽい笑みを浮かべて光輝が重ねてからかった。さすがにその意図に気付いた菜津が唇を尖らせる。

「相変わらず意地が悪いなあ」

「おかげさまで」

そこで目を合わせて菜津と光輝は笑う。共犯者的な笑い、だった。いつもはポーカークフェイスで通っている光輝がそんな風に笑うのは珍しい。菜津はそう思つて忍び笑いを漏らす。

「……何？」

「うっん、なんでもないよ」

「何ですか？」

「なんでもないってば」

「菜津さんのそういう言い方は何かある証拠。言つたら？」

「……言つたら怒るもん」

「怒らない」

「それは無理ッ！」

光輝をからかうと決まって菜津にはその二倍以上の返礼が待っていた。負けず嫌いなのかなんなのか、光輝はいつもそうだった。じやれる仔犬をあしらうように、いつも光輝は余裕の笑顔で菜津を見ていたつけ。

「信用、ないんですね」

「だって、散々からかわれたもの」

「菜津さんが可愛いから」

光輝の表情はどこか楽しげだった。菜津はその言葉の真意を未だに測りかねていて、咄嗟に拗ねることを選択する。

「……まだからかうつもり？」

「からかってなんていませんよ？」

光輝の余裕の笑みは健在だ。眼鏡の奥でニツコリと笑う瞳とまともなぶつかって、菜津は一瞬どきりとして視線を逸らした。

005：こつち見ないでくれる？

雨は突然だった。灰色の空から急に大粒の雨がばたばたと落ちてきて、もしも傘を持っていたとしても瞬く間に濡れてしまうだろう。持っていなかった場合は走るしかない。

手近に雨宿りの出来る場所を、と探して咄嗟に準が菜津の手を引いて走る。小さなベンチの置かれた公園の片隅に少しでも日除け用の屋根を見つけて飛び込んだ。……が、既にそこまでたどり着く前に雨は容赦なく降り注ぎ、ぽたぽたと髪や袖から雫を垂らしていた。「いきなりだな」

「だね。予報じゃ二十%だったのになあ」

菜津が溜息をついた。髪を撫で付けるたびに、その茶色の先端から雫が零れている。準も前髪ごと後ろに撫で付けて同様に溜息をつく。既にシャツはびしょ濡れでべったりと体に張り付いていて感触が気持ち悪い。すぐに乾くわけもない上、雨は勢いを増したように小さな日除けでは遮り切れない勢いで時折足元や肩先に降りかかる。準はふと隣の菜津の肩がやはり同じように雨に打たれているのに気付いて体をずらす。

「濡れんぞ、もつとこつち来い」

「準が濡れるでしょ」

首を振って菜津が答えるが、それを無視して多少強引に腕を引く張った。いつも菜津は無理をする。それが準には長年の付き合いでわかっていたからの行動だったが、引く張った拍子に菜津はバランスを崩して準の胸にもたれかかるようになり、一瞬浮かんだ邪な考えを断ち切ろうとするかのように準は視線を逸らした。

菜津が慌ててそこから離れようとするのを準の腕が押し留め、結局菜津は準の胸に寄り添うような格好で抱き留められていた。濡れた服を通じて伝わる体温が妙に、高い。

胸に押し付けていた菜津の体からふっと力が抜けたことに気付い

て、準がそつと菜津を見た。やはり雨に濡れて白いシャツがべたりと肌に張り付いている。そこに透ける肌の色と乱れた髪と下着のラインにどきりとして一瞬、準の体が反応する。

「……こつち、見ないでくれる？」

菜津は準の視線と、そしてそれに伴う感情に気付いて出来るだけ顔を逸らしながらそう言った。その恥ずかしそうな様子に準は冷静さを取り戻す。

「何で？」

「何でも」

「……見たい」

菜津が上げた視線の先には妙に真面目な顔をした準が抱きしめていた腕を少し緩める。必然的に二人の間に空間が生まれ、準の視線が菜津の瞳から唇、首筋、鎖骨、とだんだんおりていく。

006：待ってるよ。

バイト先からの帰り道、菜津は椎名から意外な事実を告げられる。

「……え？ 本当に？」

「うん。なっちゃんに嘘は言わないよ、俺」

いつもどおりの笑顔に迎えられ、菜津はどぎまぎと視線を逸らした。早くなった鼓動が、隣の椎名に聞こえてしまいそうだった。

「聞いてなかった？ この間準には言っただけ」

「準に？ ううん、何にも」

そういえば準はここ数日機嫌が良くなかった。今日は今日で突然バイトを休むし——どうしたんだろう。

「ふうん、そうか……」

椎名が考え込むように遠い目をし、菜津は菜津でその横顔に一瞬見惚れた。椎名の、そんな大人びた仕草が好きだった。余裕の笑みでくしゃりと菜津の髪を乱したり、悪戯っぽくこっそりと耳打ちされたり、そんなひとつひとつが酷く菜津の気持を揺らしている。

「どうしてです、か……」って聞いていいのかな」

躊躇して最後に付け加えると、「うん、いいけど」という椎名のあっけらかんとした答えに菜津は少しだけ救われたような気分でホツと息をついた。

「準と同じこと聞くね、なっちゃん」

「え……あ、ごめんなさい」

「いいけど。妬けるなあ」

ジョークっぽく聞こえたその台詞は、椎名の妙に真面目な瞳の色に菜津をドキリと黙らせるだけの効果があった。

「そ、そんなんじゃないですよ、準とは、ただの幼馴染ですから」

「そう？ いつも仲いいのも、そう？」

畳み掛けるような椎名の質問に、菜津は今まで考えたことのなかった準との関係をもう一度改めてみる。確かに、ずっと一緒にいて

心地のいい相手ではあるし安心もする。それが恋なのかどうかは菜津には判断できなかった。それよりもこうして二人で夜道を歩いている椎名のが気になっているのも事実だ。

「多分……」

「多分、か」

駅の明かりで椎名の苦笑した横顔が照らされる。ここで椎名とは別の方向になってしまふ。僅かな二人きりの時間が終わる。

「そうです、ってはずきり言えるまで——」

椎名がそういいながらそつと菜津の頬に触れた。心臓が音を立てたんじゃないかと思う程、跳ねる。菜津の視線は瞬きもせず椎名に向けられている。

「待ってるよ、なっちゃん」

菜津の唇にそつと椎名の親指がちゃんとキスの代わりに触れて、離れた。

007：やつぱ帰る。

自分を抱きしめている準の腕を振り解こうと菜津の両手が胸の前で交差した。自分で自分の二の腕を掴む指が震えている。準が怯まずにもう一度抱き寄せるが、首筋に唇を寄せようとした次の行為は菜津が体を捻って回避した。

背中を向けられた準は、そつと肩に触れる。ビクッと震える菜津の肩を引き寄せ、「大丈夫」と囁いた。

「悪い、いきなり」

菜津の震えを和らげようと準が優しい仕草で肩を叩いている。その規則的な心地良さに菜津が徐々に自分を抱きしめていた腕を緩めた。

「……ん、もう、いつもふざけてるんだから」

ジョークに摩り替えようとした菜津の台詞はどこか上滑りな感が否めず、二人の間には気まずい空気が流れた。菜津は自分を抱きしめたままこの空気を脱する言葉を考えたが、焦れば焦るほど沈黙は気詰まりとなり転換させる上手い話題は見つからない。準の手が数秒菜津の肩に止まって、それから腕の上から緩く抱きしめた。

「ちよつと、このままでいい？」

菜津は返事に迷ってから、微かに首を上下に動かす。鼓動はいつもよりも早く、煩いほどに耳に響きはするが、背中や腕に伝わってくる準の体温は心地良かった。

どのくらいそうしていたか、菜津にとってその沈黙はあまり気にならなかったものの、準にしてみればだんだんと欲望が湧きあがる堪えきれずに腕に力が入り、腕の中の菜津は思いもよらぬ密着に一瞬身体をびくりとさせた。

「このまま、いて」

「……準？」

声が掠れたのは欲望を制御するのに必死だったからかもしれない。

いつもと様子が違う準に、菜津が戸惑ってそつと名前を呼んだ。それがまるで箍を外す鍵だったかのように、準は菜津の肩を掴むと強引に自分の方へと向けさせ、正面から力いっぱい抱きしめた。突然のことにされるがままだった菜津が我に返ったときはもう、腕の中。

「……準！」

「このままいて」

囁くように同じ言葉を繰り返す準のことを、菜津は思いきり突き放す。思い切りとはいっても所詮は力が敵う筈もなく、二人の間に少し空間が出来ただけに過ぎなかった。

「やっぱ、帰る。——ごめんね」

準を振り切って菜津がくると踵を返した。待つて、と言おうとした準の唇は意に反して引き結ばれ、何の言葉も紡ぎ出せない。菜津を引きとめようと咄嗟に出した右手も、細い菜津の手首をすりと抜けてしまった。

008：無理強いは良くないな。

——あれから、菜津は準を避けるようになった。

仕方ないか、と準は溜息をつく。それでもさほど深刻でないのは、彼らが幼馴染という関係だからだ。今までもよく喧嘩をした。絶交なんて数え切れないほどしている。それでもなんとなくいつも通りに戻っているのはまるで兄弟によく似た関係性の所為だろう。

「で、何したの、準？」

椎名が楽しそうに訊ねる。一緒のシフトに入っすぐ、椎名は二人の間がいつもと違うことに気がついた。最初は様子を見るためかしばらく菜津を、それから準を観察したあとでの最初のひとことが、それである。

「別に……」

「嘘つけ。おにーさんに言っごらん？」

椎名は満面に笑みを浮かべて準を覗き込む。7cmの差はこんなとこでデカいな、いつも見上げている椎名の瞳をジロリと睨みつけた。

「なんもないっすよ」

「嘘はダメだよ、準くん。それともなっちゃんに聞いてみよ——」

「椎さん！」

準がムキになるのは椎名の計算通りだ。

「別に、ちよつと……」

「ちよつと、何ですか？」

「う、わッ?!」

いつのまにか厨房のカウンターへ来ていた光輝が言葉尻を掴んで聞き返す。

「お久しぶりです」

「お、光輝くん、バイト復帰？」

「しばらくは客で通い詰めますよ。——で、準さん、何したんです

か？」

椎名と光輝の間にこやかに交わされた挨拶のあと、光輝は準に向かつて厳しい視線を送る。その視線がちらりとホールで注文を取っている菜津に一瞬向けられた。

「だから、何も……」

「あーあ、準くん、ゲロっちゃったほうがいいよー？ 光輝くん、マジ落しモードだからねー」

楽しそうなのは椎名だけだ。光輝は真顔で準を睨み、準は困ったように視線を泳がせる。その二人の様子を微笑みながら見守る椎名も、漁夫の利を狙っているのだろう。

「いや、あのな、コーキ聞け、いいか？」

「何したんですか？」

光輝の追及の手は緩まない。バイト時代も一旦食い付くと落ちるまで離さなかったな、と準は思い出していた。

「いや……えっと……ちょっと抱きしめて……」

「合意の上ですか？」

「いや、あの……」

「あーあ準くん、無理強いは良くないなあ」

光輝の目がギラリと光って頬が引きつる。椎名は楽しそうに声を上げて笑うと準をからかった。しかしその目は決して笑っちゃいない、と準はひそかに思う。

009：手、痛いんだけど？

菜津は自分の仕事を終わるとさっさと帰り支度を始めた。ちなみに準は黙々とシンクを洗っていて、菜津のそんな様子に気づくことはなさそうだ。

「お疲れさまでしたー」

そう声をかけたことで準はやっと事を知る。しかし視線は合わず、そそくさと逃げるように行ってしまう菜津。引き止めようにも、既にその姿は消えていた。

店の裏口を抜けると、菜津は次の曲がり角まで走る。何故、というわけではないが準がまさか仕事を放り出して追ってくることはないにしても——怖かったのだ。

しかし角を曲がる寸前で菜津の右手が掴まれる。

「……きゃっ！！」

元々、準が追ってくることを恐れていた菜津が過剰に反応して悲鳴をあげた。身体は明らかにびくりと震えて、その腕を掴んだ光輝は一瞬驚いて手を離しそうになる。

「菜津さん、僕。——菜津さん？」

「あ……光輝、くん……」

振り返った菜津の瞳が光輝を認めて明らかにほっと安堵する。その表情の変化に、光輝は菜津が駆けて来た道を振り返った。誰も怪しそうな人影は見えない。勿論、準の姿も。

「どうかしたんですか？ 顔、真っ青」

「うつん、ちょっとびっくりしただけ——」

気が抜けた菜津の足がよろめき、咄嗟に光輝が左腕を菜津の腰に回して支える。引き寄せられてまたも菜津の身体が震えた。

「大丈夫、何もしませんよ。安心して」

右手で菜津の手首を掴まえたまま、光輝は腰に回した左腕を引き寄せた。光輝の顎の下にすっぽりと収まってしまった菜津は戸惑う

ものの、守られている安心感の方が勝つ。

しかしそれでも十分もその体勢でいると菜津に恥じらいの感情が生まれる。少ないとはいえまだ人通りはそこそこにある。時々、菜津と光輝のことを明らかにカップルを蔑むような目で見ていく通行人もいた。

「光輝くん、あの……」

「何ですか？」

奈津が光輝を見上げたが、光輝の視線は菜津へおりてこない。わざと視線を合わせないようにしているかのように銀色の眼鏡の奥の瞳は遠くを見たままだった。

「あの……手、痛いんだけど……？」

恐る恐る菜津が言くと、さすがにそれは光輝の予想外だったらしい、慌てて両腕を緩める。

「ごめん、僕、つい本気で抱きしめてたから」

それは確かに事実であり、光輝にしてみれば本音ではあったのだろうけれど、菜津をドキリとさせるには充分だった。

010：もう、疲れた。

街中で椎名に会ったのは偶然だった。咄嗟に菜津は椎名の周囲に七美の姿を探している自分に気付き、苦笑する。

「どうかしたの、なっちゃん？」

「いえ、なんでも。——おひとりですか？」

「エエ、おひとりさます」

茶化した風に椎名が肩を竦めて答えるのに菜津が笑う。

「なっちゃんは？ 準と一緒にないんだ？」

さらりと、しかし確信犯的に椎名が悪戯っぽく尋ねた質問に菜津は一瞬逡巡を走らせる。既に準が口を割っていることは菜津は知らない。

「ええ、まあ……いつも一緒ってわけじゃないですよ」

「喧嘩でもしたの？」

そこでやっと菜津は椎名の言葉にある種の探りが入っているらしいことに気付き、じっと見上げる。その視線を受けて椎名はおや、と思う。

どうやら感づいたらしい、と、そこまでは嗅ぎ取ったがそれ以上はわからなかった。怒るか誤魔化すか——どっちにしても椎名にとつては反応が予想出来る。

もしかしたら準がなにか言ったのかもしれない、と菜津は考えた。確かにここ一週間の自分たちの様子は傍から見えていてわかるくらいおかしかつただろう。椎名がそれに気付いていてもおかしくはない。

「ええ、喧嘩中なんです」

菜津の回答はある意味、椎名の予想を裏切っていた。

「痴話喧嘩？」

それでも力強い返事を返すことが出来た自分に椎名自身、驚いていた。真正面から肯定されるとは思ってもいなかった。

「なんですか、痴話喧嘩って……そんなんじゃないですってば」

菜津が不服そうに唇を尖らせる。シリアスを回避できたことに椎名はほっとして笑顔をつくった。

「まあまあ、そう怒らないの」

ぽんぽんと菜津の頭を軽く叩くと、擦り寄ってくるような感覚を覚える。どうやら準とのやりとりは菜津に大分ダメージを与えているらしい。

「なんかもう……疲れた」

ぼろりと零れたのは菜津の本音だったに違いない。けれど椎名にはその原因が準とのことにあるのはわかってても、喧嘩そのものなのか、準との関係がなのかまでは判断できない。

「うん、大丈夫」

何が、と菜津は問わなかった。その前に、菜津が何か言う前に椎名は菜津の頭を抱き寄せていた。

菜津は抵抗しなかった。あたたかいな、と、準に抱きしめられた時に感じた同じことを考えながら椎名の胸で一粒だけ、涙を零した。何のための涙なのかはわからなかった。

011：お楽しみはこれからサ。

「……で？」

「で、って……それだけだよ、駅までお送りいたしました」

につこり笑った椎名を、光輝が何か言いたそうな目で見ている。

勿論椎名はそんなことなど承知の上だった。『何？』とばかりに首を傾げる。

「椎名さんらしくないですね」

「光輝くんだったら、そんな言い方すると俺が随分非道に聞こえるんだけど？」

「違いましたっけ？」

「……言うねえ、若者」

光輝としては、椎名がそこで菜津に迫らなかったことが逆に不安だった。少なくとも菜津が椎名に好意を持っていることは光輝でも感じていることだったし、そのタイミングで菜津に言い寄らなかつた椎名の行動は、今まで光輝が知っている過去からすれば意外、だった。

「弱みに付け込むなんて、そんなコトしませんヨ、ボクは」

茶化した口調で椎名が言うのへ、光輝が疑いの眼差しを向ける。

「そんなコワイ顔するなって」

ポン、と光輝の頭を軽く叩くと、恨めしそうな視線が上へ向く。

「それとも何、俺になっちゃんを襲って欲しかったってワケ？　じやないでしょ？　光輝くんとしてはそこで俺がなっちゃんを襲ってもマズイワケじゃない？」

核心を突くようなことを、椎名はいともさらりと口にした。光輝としてはバレてはいるだろうと踏んでいたものの、さすがにストリートに言われると動揺が隠せない。椎名の余裕は年齢の余裕、でもある。

「別に、僕は……」

「マズくない？ マズイよね？ 俺のこと、きつとぶん殴ってるかもね」

そんな風に笑いながら言う椎名に、正直、光輝は敵わないと感じた。椎名に感じるのは羨望と一緒に嫉妬でもあった。

「椎名さん、ホントにホントのところ、何で菜津さんに手、出さなかったんですか？」

改めてそう訊ねたのは、どこか椎名の返答に胡散臭さを感じていたのかもしれない。椎名がやれやれといったように溜息をついて困ったように光輝を見ると、その瞳の真剣さに一瞬、迷う。

「言っただでしょ？ 弱味に付け込んでモイコトないんだってば」

光輝の瞳の色は弱まらない。じっと見つめていた椎名の目がふと、緩んでにやりと光った。

「——お楽しみはこれからサ」

「……やつと本性、表しましたね」

「酷い言い方だね、仮にも年上だよ？」

「好敵手に上も下もないでしょう」

やつと光輝の表情にも余裕の欠片が浮かび、口許が緩まった。

012：たまにはこっち見てよ。

ぼんやりと考え事をしていたらしい。菜津は自分と呼ぶ声にはつと気付いてやつと我に返った。振り返ると光輝が苦笑しながら近づいてくる。

「……ごめんね、なんかポケットとしてたみたい」

言われる前に謝ると、光輝はにっこりと笑って首を振る。「いや」と小さく呟くと今度はその笑顔をいつものからかい笑いに摩り替えた。

「誰かさんのこと考えてた？」

菜津が一瞬息を呑んだのを光輝が気付かないわけはなかった。が、それに言及するつもりもない。十中八九、椎名のことを考えていたんだろうことはわかってる。

「ううん、今夜の賄い何かなって」

ふざけて笑いに摩り替えようとする菜津が光輝には逆に切なく感じて、その瞬間抱きしめてしまいたい衝動に駆られる。勿論、それに耐えはするのだが。

「今夜、菜津さんと誰？」

シフトはほぼわかっていたが、光輝が改めてそう訊ねたのは多少なりとも椎名に反抗心があったのかもしれない。言ってから、もしかしたら菜津が泣いてしまうのではないかと酷く恐れた。

「うーんと……椎名さんかな」

「準さんじゃないんだ？」

笑顔の菜津の顔に、一瞬雲が走る。どうやらまだ仲直りはしていないらしい、と光輝はひそかに不器用な先輩に同情した。しかし日頃から募っている嫉妬はそんなことじゃ緩まない。

「あ、うん。準、ここのところ忙しいみたいで」

「気にしてるんですか？」

菜津の返事を途中で切替すように光輝は言った。瞠目する菜津に

感情的に言葉を重ねる。

「準さんのこと、気にしてるんですか？」

「え……別に……」

眼を逸らす菜津に明らかに言い過ぎたと光輝は後悔し、素直に謝ることにする。

「ごめんなさい、僕ちよつと言い過ぎてますね」

「ううん、いいの、大丈夫」

「でも、菜津さん」

苦笑気味で首を振った菜津は何？と微かに首を傾げて光輝の次の言葉を待っている。妙に真面目な光輝の視線にどきりと胸が鳴るのを慌てて、抑えた。

「たまにはこっちも見て、なんて我俣言ってもいいですか？」

咄嗟に菜津がイエスもノーも返せなかったのは、口調こそ笑いが混じっていたがその瞳の真摯さゆえかもしれない。一瞬、くらりと揺れて泣きそうになったのを自制する。

0 1 3 : なんかフラフラする。(前書き)

0 1 3 : なんかフラフラする。

013：なんかフラフラする。

店に足を踏み入れて、菜津は自分でも分かるくらい明らかにぎくりとしたのを感じた。椎名がいるはずの厨房には見慣れた後姿があったからだ。

「椎名、さんは？」

おずおずと、だがしつかりと疑問を声にした菜津に、準は平静を装って何でもないことのように答える。

「なんか、遅れそうだからその間だけでもって、さつき電話来て、さ」

「……そっか」

少しほつとするのは、椎名が遅れて来るということだ。このまま準と閉店までのシフトをこなすのはあまり気が進まない。準の方もそれはどうやら同じらしく、背を向けて仕込みに取り掛かる。

沈黙が流れて一時間経ったところ、やっと椎名が姿を現して二人は一樣にほつとした。その表情に気付いた椎名はやれやれといったように肩を竦めて見せる。

「悪いな、準、さんきゅ」

「ホントっすよ、俺風邪気味なのに呼び出すんだもんな」

「オイオイ、うつすなよー？」

「わかんね。なんかフラフラす、るし——」

椎名がふざけて笑ったのと同時に、準の体がぐらりと揺れる。咄嗟に椎名がその体が崩れ落ちるのを支えて堪えた。菜津は届かないのをわかってはいたものの、手を伸ばしかけていた。

「なっちゃん、バックヤード片付けて、タオルとかで横に出来る場所、作ってくれる？」

「は、はい！」

準の体を支えた椎名が落ち着いて出した指示に、菜津は弾かれたように奥の扉へ飛びついた。幸い客は常連がひとりだけで、椎名が

苦笑気味に頭を下げると眉を寄せて厨房を覗き込んでいる。

「椎名さん！」

「さんきゅ」

奥の扉から菜津が出てくると同時に、椎名が準を抱えてバックヤードに消える。ほどなく戻ってくると大きく息をついて、心配そうな菜津に向かってにつこり笑いかけた。

「ありがとね、なっちゃん。混むまでホールも俺がやるから、準についててやってくれる？」

こつくりと大きく頷くと、手早くタオルや水差し、コップなどをトレイに載せて菜津はバックヤードの扉を押す。狭くて薄暗いそんなところに喧嘩中の相手と二人きり、などということは吹っ飛んでいた。冷やしたタオルを額に乗せると、準が無意識にもその浅い呼吸を緩めはじめて、とりあえずはほっと息をついた。

014：わかったから離せって。

菜津が妙に神妙な顔で黙ったままだった帰途、ぽつりと告げた言葉で準は、随分と菜津が気にしていたことに気付いた。

「……ごめん、ね」

「ンでお前が謝るんだって。俺が悪いんだろ」

「でも……ごめん」

準としてはうなだれた菜津を見るのは好きではなかった。心配してくれているのは充分わかったから、と何度も言っただけれど。

「謝るなって」

いつも以上に陽気に言ったのは菜津の気持ちを引き立てたい所為だ。実際、体調は万全とは言えない。随分バックヤードで休んだとはいえ、時々くらりと眩暈がする。

おどけて菜津の頭をぼんと軽く叩くと、くいつとシャツが掴まれるのがわかった。どきんと一瞬、胸が跳ねる。

「準、あたし……」

「もーいーからさ。俺が謝んなきゃいけないことだし、大体何でお前が謝るんだつつの」

菜津に全部を言わせる前に準は強い口調で遮った。視線は真っ直ぐ前を見たまま、菜津のことは振り返れなかった。もし振り返って泣きそうな顔でも見てしまったらきつと、抱きしめてしまうだろうと自分でわかっていた。

しかし菜津は準の口調がいつもと異なることに勿論気付いている。今のように無理矢理話を打ち切ろうとするときはそれが本心ではなく誤魔化そうとしている時だ、というのもわかっていた。準のシャツを掴む手にぎゅっと力が籠る。

「ちゃんとこっち向いて、言ってよ……」

抑えようとしても声が震えてしまう。泣くのはだけは嫌だった。奥歯を噛みしめて告げた言葉に、準は一瞬理性を失いかけて強く眼を

瞑る。

準にとって気持ちを静めるまでの数秒は、菜津にとって不安が巡る刹那だった。何故準はきちんと自分を見て本当のことを言ってくれないんだろう。菜津を抱きしめたいと思う気持ちは何故抑えなければいけないんだろう。

多少長過ぎるような間があつて、準が押し殺した声で呟く。

「……わかったから離せって」

「え？」

「手。離せ」

「あ……うん」

ふわりと菜津の手から準のシャツが解放される。それと同時に菜津を振り向いた準の表情は妙に生真面目で怒っているようでもあったが、菜津がそれを指摘する前に右腕が強く、引かれた。

「さっさと帰るぞ」

強く握られた掌は熱く、うつすら汗をかいているようでもあった。菜津は手を引かれながらもどうやら準が怒っているのではないらしいことを感じてほっと笑みを浮かべた。

015：今だけでいいから、このままでいてくれる？

「菜津さん、駅まで送りますよ」

「——ありがと。ねえ光輝くん、バイト戻らないの？」

菜津の帰りに合わせて店に居合わせた光輝が腰を上げ、駅までの道程を二人で歩く。菜津が軽く訊ねたそれに、光輝は「うーん」と眉根を寄せた。

「ええ、今のところは客で充分ですよ」

「そなの？ 頻繁に来てるんだし、厨房入っちゃえばいいのに」

笑いながら菜津が言っていると、急に左腕をがくんと引かれる。その菜津の数センチ先を大型トラックが通り過ぎ、その風で菜津の髪がなびいた。

「……あー、びつくりした」

「じ、めん……あたしもびつくりした……」

珍しく光輝が焦った表情で言っていると、さすがの菜津もあつけにとられて呟いた。身体に感じた風の強さが危険の近さを物語っていた。

「……光輝くん？」

菜津が不思議そうに名前を呼んだのは、トラックが過ぎて気分も落ち着いたところでまだ、光輝が自分の手を握っていたからだ。どうしたんだろう、とちらりと光輝を見ると、眼鏡の奥の瞳が僅かに微笑んだ。

「今だけでいいから、このままでいてくれる？」

そう言いながら、繋いだ手を軽く掲げてみせる。菜津がその意図が読めなくて多少困惑しつつ返事に詰まっていると、光輝はにやりといつもお得意のからかうような笑みを浮かべた。

「菜津さん、時々子供みたいに危なっかしいから、保険」

「……馬鹿にしてる」

「さっきの僕、寿命三年は縮みましたからね、その分ケアしてもらわないと」

悪戯っぽい光輝の笑みと皮肉った口調はまったくいつも通りで、一瞬感じた邪な予感は一瞬で消えうせていた。

「これがケアになるの？」

「ま、利息分くらいかな。元本はしっかりカラダで返してもらいますよ」

きゅつと握った手に力を込めると光輝はさらりとそう言い、菜津が膨れるのを見て肩を竦めて笑う。拗ねた菜津の表情が可愛い、と手には自然に力が籠る。

「なんか……」

「何？」

恨めしそうに上目遣いで見上げる菜津に、光輝がにつこりと優越に似た笑みを返す。その表情に菜津が小さく溜息をついた。

「光輝くん、準に似てきた」

「それ、褒め言葉になってるのかな」

「……微妙」

ぎゅ、ともう一度返事の代わりに菜津の手を握り締める。そのぬくもりを感じ、光輝はそのひとときだけとはいえ、とても幸福な気持ちでいた。

016：逃げんなよ。

厨房からホールを眺めながら、椎名はにっこりと笑った。その笑みの先にはホールの制服を着た準が、引きつった笑顔で客に向かっている。ぺこりと一例するとオーダー表を持って厨房へと差し出す。「オーダー入りますよ。……そのニヤニヤ笑い、止めたら？」

「いやー準くんホールのカツコ、似合うね、俺、惚れそう」

「何馬鹿言っただか……仕事仕事！」

準の頬が微かに赤らんでいるのは確かに着慣れないホールの制服も原因のひとつだが、椎名が嬉しそうに自分を観察するその視線も拍車をかけていた。

「まあ、なっちゃんに介抱してもらったんだからさ、それくらいお礼しないかね？」

「ったく、菜津の奴……！」

不貞腐れて準がカウンターに背中を預けた。確かにバイトを代わるのは構わなかったが、食事に連れてくとかそっちの方が良かったとひそかに溜息をつく。しかしそこでちらと椎名を見てまあいいか、と思い直した。

もしも準が代わらなければ今日は椎名と菜津でラストまでだ。二人きりにするのを阻止できただけでもいいとしよう、と準は無理矢理自分に納得させる。

「いらつしゃいま——」

ドアベルがカラリンと音を立て、咄嗟に作り笑顔で振り向いた準の顔が凍りついた。にっこり笑いながら手を振った二人連れは紛れもなく、噂の主、菜津と光輝だったからだ。

「あ、いらつしゃーい」

「いらつしゃいましたー、オーダーお願いしまーす」

目敏くその姿を見つけた椎名が厨房からにこやかに声をかける。

菜津と光輝の視線を受けて準の頬が一層赤く染まった。楽しそうな

菜津の声がテーブルから聞こえてきて、準はさすがにがつくりとカウスターに突っ伏した。

「ホラ準、お客様がご指名だよ？ 十一番テーブル」

「椎さん、代わって……」

「こちら、逃げんなよー。お姫様のご指名なんてそうないでしょ？ そーれとーもー」

じろりと眼だけで見上げる準の耳元に椎名が唇を寄せる。言葉が紡がれる前に準は何を言われるかわかったような気がしてあからさまに眉を顰めた。

「俺がお姫さまをお迎えに行こうかな？」

何も言わずに身体を起こすと、準はふたつのコップとメニュー表を持って十一番テーブルへと向かう。その後姿を見ながら椎名が楽しそうにくっくっくっくと肩を揺らした。

017：目開けて寝言か？

菜津はにこにこしながらホールの準を見ていた。その視線の動きを光輝はじめは楽しんでたものの、しばらくすると真顔になって菜津を見つめる。菜津はそれには気づかず嬉しそうな顔で光輝に向きなおる。

「ふふつ、準、ホールの恰好も似合ってるよね——光輝くん？ どうかした？」

「いーえ、どーも」

光輝の顔に笑顔はない。口調も投げやりで冷ややかだ。当然菜津も気づいて眉をしかめる。

「どうしたの？」

ちよつと頬をふくらませる菜津のその表情はずるい、と光輝は思いつつ後悔したがすぐに謝れるほど素直になれない——嫉妬の先がすぐそばにいるのなら、なおさらだ。

「僕、当て馬ですか？」

言い方がストレートになったのは光輝の中にある嫉妬のせい。言つて後悔したがすぐに謝れるほど素直になれない——嫉妬の先がすぐそばにいるのなら、なおさらだ。

「そついうつもりじゃ……」

案の定、菜津の表情が曇る。彼女の笑顔が好きなのになんてさまだ、と光輝は次の言葉を探すが、見つかる前に恋敵が近づいてくるのを視界の隅に見つけて黙り込んだ。

「あいよ、Sセツトお待たせ。……コーキ？ どした？」

準が注文の料理を運んできて二人の間の妙な沈黙に気づくときよんととして後輩に声をかけた。

「うつん、なんでも」

「菜津さんがずっと準さんを見てるんで、嫉妬したんです、僕が」
菜津が苦笑を浮かべて否定するのへ、光輝が皿を受け取りながら

しれつと言った。相変わらず口調は冷やかで、感情を読み取らせない。準は棘のある返事に瞠目はしたものの、ふっと軽く息をついて光輝を横目で睨む。

「アホか、お前。目開けて寝言かよ」

「事実です」

「バーカ」

呆れたように言う準と、困惑を浮かべる菜津の視線が合い、菜津の方が先に逸らした。その一連の動きを観察していた光輝は、気にすまいと自分に言い聞かせてフォークを手にする。

「準、あがつたよ」

厨房から椎名の呼ぶ声にテーブルを離れていく準の後姿を、光輝は横目で追っていた。

「光輝くんて……準にはきついよね」

「そうですか？」

菜津が溜息交じりに呟くのへ、平然と光輝は答えながらフォークを口に運ぶ。

「準のこと、嫌いなのか？」

「……は？」

声をひそめた菜津の質問に、光輝は瞬きを繰り返す。——本当に、このひとは……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0746g/>

戦線協定

2010年10月15日22時27分発行